

# 学生の手で戦禍 リアルに



堀江さん（右）から当時の状況を聞く学生（左）ら  
＝2024年12月、仙台市青葉区の河北新報社

「大学生に作業をしてもらつたらどうですか」。昨年10月、カラー化を数多く

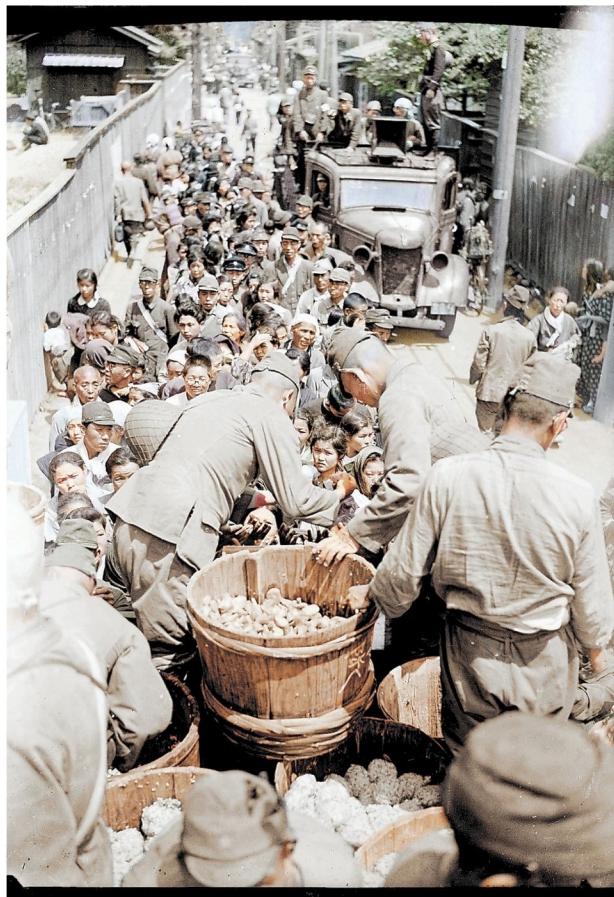
(吉江圭介、桜田賛一)  
手がけている東京大太学院の渡辺英徳教授（情報アザイン）から記者への提案が、プロジェクトに学生が参画するきっかけだつた。

渡辺教授には「学生が作業を通して当時をリアルに感じた上で、戦争体験の記憶を社会に広げた方がいい」との考えがあつた。

戦後80年に合わせ、河北新報が進めた戦災写真のカラー化プロジェクトは、宮城学院女子大（仙台市青葉区）の学生の力を借りて実現した。戦争体験者が少なくなる中、慘禍の記憶を引き継ぐ作業に自ら関わった若い世代の活動を報告する。

(吉江圭介 桜田賢一)

# 宮城学院女子大 仙台空襲経験者に聞き取りも



仙台空襲後、炊き出しのおにぎりなどを求めて市民が行列を作った=1945年7月12日河北新報掲載

「色加わり感情伝わる」

河北新報が戦後80年報道で連携を探つていた宮城学院女子大の協力を得て、プロジェクトは昨年12月に本格始動した。呼びかけに応じ、学生14人が集まつた。同月には河北新報で収蔵する戦時中と戦後の白黒写真から素材を選んだ。色彩監修で協力を受けた戦災経験者、歴史研究者が同席する中、仙台空襲経験者の堀江俊男さん(89)＝太白区＝に当時の話を熱心に聞く学生の姿もあつた。

今年1月、渡辺教授が技術指導のため宮城学院女子大を訪問。人工知能(AI)を用いて自動彩色するアプリ、別の画像編集ソフトを使って色を付ける方法を学生に伝えた。

学生は分担して作業を進めていた。中旬までに完了した。

「藤崎から東一一番丁北を望む」の写真を担当した人間文化学科4年(当時)の吉田愛花さん(22)は、「戦禍の史料を伝承する取り組みに参加できて本当に良かった。戦災写真のカラー化というお手伝いの方法があることを多くの人に知つほしい」と語った。

渡辺教授もプロジェクトをきつかけに、戦争の記憶をつなぐ活動が広がることを期待する。「1期生として後輩にカラー化の技術を教え、ぜひ取り組みを続けてほしい」と話した。